対話 2

地域に飛び出し、時間割を超えた学びを深める学校に

学習院大学教授、
中央教育審議会委員
秋田喜代美

×

福島県立福島高校
3年生
伊関佳純（いせきかずみ）

校内の仲間、そして地域の人たちと協働して防災教育に取り組んできた伊関さん。防災という社会的テーマを探究する中で気づいた高校生の力や使命を踏まえて、これから創りたい社会と教育に望むことを、秋田先生と語り合った。

〈伊関さんのこれまでの歩みはP.7で紹介〉

地域の人たちと学んだ「幸せ」のあり方

伊関　私が創りたい社会は、地域住民の関係性が豊かな社会です。私は防災について探究する中で、住民同士の結びつきが強い地域ほど、災害時に円滑な対応ができることを学びました。また、高齢社会という観点でも、地域の人たちの見守りという「共助」があれば、各家庭の高齢者の介護を支援することにつながります。

秋田　伊関さんのお話を聞いて素晴らしいと思うのは、防災を、形骸化した避難訓練の見直しといった学校の問題にとどめず、地域と学校の普段のつながり、さらには学校が避難場所として多様な地域住民を迎え入れる時の高校生の存在意義など、広い視点で考えたことです。自分たち高校生は、地域の人たちをつなぐハブであると自覚して、防災を見つめ直したんですよね。

伊関　住民間の関係性が希薄な地域社会は、安全でも安心でもないと私は思います。また、すべての人が尊重されるような地域社会であることも大切です。コロナ禍においては、感染した人を排除するような事例もありましたが、そうしたことを繰り返してはいけないと思っています。

秋田　防災教育を通して社会的弱者と呼ばれるような人にも目が向いたことで、一人ひとりの幸せを実現するつながりのあり方を捉え直されたんですね。人が他者とのつながりや関係性に基づいて互いに幸福になっていくことに高校時代に気づいたことは、大きな価値があると思います。

高校生にできることはもっとたくさんある

伊関　私がこれからの学校に望むのは、もっと地域とのかかわりを深めてほしいということです。中学校、高校と進級するに連れて、地域と学校との距離は開いていったと私は感じました。しかし、私が仲間たちと福島高校で防災ワークショップを開催した時には、想定以上のたくさんの地域住民が参加してくれました。高校生が声を上げることを、地域の人たちは期待してくれているのだと思いましたし、高校生だからできることはたくさんあるはずだと考えるようになりました。

秋田　「高校生だからできることがある」という考えは、防災ワークショップなどを通じて学校から外の世界へ一歩踏み出し、高校生以外の人たちと触れ合ったからこその気づきですね。

伊関　学校では、「これからは地域との結びつきが大事」とよく言われます。しかし、高校生が地域との新たな結びつきをつくる実践の場は、高校にはほとんどありません。地域とのつながりなど、社会問題に関心を持つ高校生は少なくないのですから、実践に足を踏み出そうとする生徒がいたら、学校にはぜひ応援してほしいと思います。その点、最初に私たちの取り組みについて相談した時、「やってみよう」と前向きな言葉をかけてくれた先生にはとても感謝しています。「高校生だから難しいのではないか」という不安な気持ちを先生が取り除き、私たちの主体性を尊重しながら伴走してくださったことで、私たちは活動を広げていくことができました。

撮影場所：伊関さんが通う福島高校の教室。

人とのつながりの中で一人ひとりが幸せを実感できる社会を！

学校周辺の危険地域を洗い出したマップを地域住民と作成し、共有。さらに、オリジナルの防災ゲームを開発して地域住民とともに取り組むなど、伊関さんの活動は常に地域とともにあった。

一人ひとりの生徒を信頼し、学びを委ねる

秋田　これからの学校では、それぞれの生徒が関心を持ったテーマについて探究する時間がますます重要になります。だからこそ、あらかじめ時間割で決められた授業も大切ですが、時間割で決められていない学びや、学校外で多様な人々と創っていく学びも同じくらい大切なのだと思います。

伊関　秋田先生のお話を聞いて、自ら学ぶこと、探究することは、チャイムによって区切られるものではないと思いました。私が取り組んだ防災教育についての活動も、チャイムで区切ることはできない活動でした。時間割で決められていて、チャイムで区切られる学びももちろん大切ですが、チャイムで区切られない学びに取り組む高校生をもっと応援する社会になればいいなと思いますし、高校生の背中を押すことで、きっといろいろな活動が生まれてくるのではないでしょうか。

秋田　私は、学校の中で流れる時間を見直すことが、これからの教育を考える上では必要だと思っています。生徒によっては、授業に集中できる時間は50分よりも短いけれど、探究したいことについては時間を忘れるほど長く没頭できるかもしれない。一人ひとりの生徒を信頼し、学びを委ねることで、本人が納得いくまで学びを深めていけるような学校の時間のあり方を考えていきたいです。伊関さんのように、学校という場所や時間割を超えて深い学びにたどり着ける生徒が、1人でも多く生まれるような教育でありたいと思いました。ありがとうございました。